

# 地域や家庭とのつながりを実感することで、 毎日の朝食に積極的に関わる態度を育てる学習

～6年「いためてつくろう朝食のおかず」の実践を通して～

秋山玲奈

『家庭科研究実践 六年「いためてつくろう朝食のおかず」の実践を通して』

## I はじめに

全体研究の3年次テーマ「子供が学びをつなぐ学習づくり」を受け、家庭科の3年次研究では、つながりを明確にすることで、家庭及び地域に積極的に関わりをもとうとする態度をより一層育む授業づくりについて研究を進めた。「家庭及び地域に積極的に関わりをもとうとする態度を育む」ことは、次期学習指導要領において、新設された「家族・家庭生活についての課題と実践」のために最も重要な態度である。

家庭科の学習は、普段の生活や社会に出て役立つものであり、将来生きていく上で重要になるため、児童の学習への関心や有用感が高いという成果がある。その一方で、家庭や地域の人々と関わることや、家庭での実践や社会に参画することが十分ではないことに課題があるとされている。家庭科の学習は、毎日の生活の営みに直結していることを考えると、家庭科の学習で身に付けた知識及び技能を、家庭及び地域で、児童が主体的に活用しようとする態度を育成することが必要であると考えます。

そこで、家庭科における3年次研究のテーマを「家庭や地域に積極的に関わる態度を育てる家庭科の学習」と設定した。「積極的に関わる」ためには、課題解決の過程で家庭及び地域とのつながりを実感させることが重要になる。そこで、課題の設定から解決までの一連の学習過程を工夫した題材を計画的に配列すること、家庭及び地域での実践を学習過程として位置付けることを中心として、家庭及び地域に積極的に関わる態度を育てたいと考えた。



保護者にいためる調理の質問をする児童の姿

## II 研究の目的と方法

本研究の目的は、児童の「家庭や地域に積極的に関わる態度」を育てるための効果的な手立てについて明らかにすることである。そのために、以下の2つの視点から授業実践「いためてつくろう朝食のおかず」における児童の様子について分析する。

- ①題材相互のつながりと見方・考え方の視点を明確にした題材構成の工夫
- ②一単位時間における導入と終末の工夫

なお、研究の対象とした題材の概要は以下の通りである。

### 1 題材名 「いためてつくろう朝食のおかず」

### 2 題材の目標

朝食の在り方に関心を持ち、その大切さに気付くとともに、課題を設定し、朝食に合う簡単なおかずを工夫したり、材料や目的に応じたいため方について考えたりする。

### 3 題材の概要

生活時間調べを通して、家族との関わり大切さや朝食摂取の意義、家庭生活の仕事の一つである朝食に適した調理法の理解を深め、家庭生活に積極的に関わろうとする態度の育成を目指して指導した。家族と過ごす時間が少なく、朝食の調理経験が低いという児童の実態から、特に、家族と関わる時間を増やしたり、家族のことを考えた朝食作りをしたりする家庭での実践に結びつける学習の充実に重点を置いた。家庭を想起させたり、家族の思いを聞いたり、家族への思いを表現したりする活動を繰り返した。

### Ⅲ 結果と考察

#### 1 題材相互のつながりと見方・考え方の視点を明確にした題材構成の工夫

##### (1) 結果

本実践では、児童が家庭及び地域とのつながりをより深く実感するために、見方・考え方を明確にした題材構成で学習を展開した。具体的には、いためる調理を学ぶ過程において、毎時間、見方・考え方に関連する手立てを取り入れた。

時間	学習活動	見方・考え方	学習と家庭・地域をつなぐ工夫	学習に対する児童の思い
1・2	朝の時間の過ごし方を見つめる。	協力	保護者の生活時間との比較	親の生活時間は、家庭の為の仕事をの時間が多く、一人の時間が少なかった。忙しいと思うので、もう少し手伝いたい。
3	朝食の役割を考え、自己や家族の朝食の在り方を見つめる。	協力・協働	保護者の朝食への思いの理解(メッセージ)	私の朝食には主食・副菜と主菜もはいていてお母さんはそれを教えて作っていてありがたいと思えました。
4	我が家の朝食づくりから、いためる調理について考える。	協力・協働	家庭でのいためる調理の実態把握(アンケート結果)	お母さんは、色どりや切り方に工夫しているんだらうな...と思いました。母のいためる物は、自分好みの味・野菜で出来ているので、自分も、母好みのいためる物をつくりたい。
5	朝食づくりに適した「いためる」調理方法について知る。	健康・安全	保護者及び栄養教諭によるいためる調理の実演	親の料理をしている姿をあまり見に行った事はないか、今日見た他の保護者の方と同じようにしているのか、気になったので、見てみようと思った。
6 本時	食品の加熱変化について、切り方と調理時間の対照実験結果を比較する。	安全、協働	保護者へのいためる調理についてのインタビュー(ゲストティーチャー)	調理は、けい馬をとして、上手に作れていくものだと思いました。これからは、ご飯に感謝してこれからはできるだけお手伝いをして、お母さんから切り方や順序を聞きたいと思いました。
7・8	いためてつくる朝食のおかずを考える。	健康、協力		はくは材料の選んだ視点は、ふだん出ている物を考えました。肉類は、みんなが好きなので入れました。「いためる調理」を通して、親がつかれている時や大変そうなおきに、積極的に手伝おうと思う。
9 10	考えたメニューで朝食づくりをする。	協力、安全	家族からの朝食メニューへの評価(メッセージ)	良かった点は、野菜、塩、ひと、入れた順番です。改善すべき点は、いためる方で、お母さんからも「ぜひ使え」と言われたのでおいしくできようから、このようにいためたいです。家で作りま。
11	いためる調理について振り返り、家庭での実践計画を考える。	協働	家族からの実践計画へのアドバイス(メッセージ)	試作では、塩が少なすぎた。家族からは、彩りに人参を入れたらいいと言っていました。理由 野菜いために、明るい色がないので、人参を入れたらいいと思います。
12	家庭での実践における成果と課題について交流し、様々な事例を知る。	協働	家族への思いの発信(プロジェクトシート)	家族からのアドバイスをきいて、野菜いためをつくらときは、味や見た目でなく、歯ごたえにも気を付けてつくろうと思えました。

#### 資料1 見方・考え方に関連する手立てを取り入れた題材計画と児童の思い

本題材では、生活の営みに係る見方・考え方のうち「協力・協働」の視点を重視して題材を構成した。家庭生活における朝食づくりにおいて、「協力・協働」の視点を与えることで、児童が家庭生活に積極的に関わろうとする態度を育成できると考えた。

学習活動に対して、毎時間重視する「見方・考え方」を明らかにし、それに関わる手立てとして、保護者及び地域からの思いを知る場面を設定した。具体的には、保護者及び地域からの思いを表現する立場として保護者2名と栄養教諭1名に、第1～6時間目までの毎時間、学習への協力をお願いした。1～4時間目までは、保護者2名の生活時間調査の結果を提示したり、朝食作りへの思いやいためる調理への思いをメッセージ等で提示したりすることで協力・協働の視点から家庭生活の工夫を考えさせた。生活時間調査では、保護者が一日を通してどのような生活を送っているのかを児童の生活

時間調査の結果と比較させた。保護者の生活時間の中で最も多かった「家庭の仕事」をする時間は、児童にとって最も少ない時間であり、保護者にとって最も少ない時間である「自分のための時間」は、児童にとって1・2を争うほど多い時間という結果について、協働の視点から違いを明らかにした。5・6時間目には、保護者2名と栄養教諭1名の計3名をゲストティーチャーとして調理の実演やいためる調理についての思いを聞く場面を設けた。保護者や栄養教諭が家庭科の学習に参加し、児童の前でいためる調理を実演した際には、家庭の実態に応じたいため物を調理してもらい、児童は比較しながら3名の調理を記録・分析させ、家庭生活の中の健康や安全、そして、家庭生活への協力の視点で学習を進めた。7～12時間目には、児童一人一人が、それぞれ、自分の家庭に対して自分の思いを伝えたり、児童の思いを受けた保護者の思いを聞いたりする場面を設定した（協力・協働の視点）。家族のために考えたメニューに対して保護者からのメッセージを受け取る活動では、「我が家のいため物には、にんじんが入っているので、調理するときには使ってほしい。」「食材をいためる順番は、固くて火の通りにくい物から先にいためるんだよ。」などの具体的なアドバイスをもらう児童も多かった。

学習の中で児童は、家庭生活に対して「もう少し手伝いたい。」「自分も母好みのいため物を作りたい。」「親の調理をしている姿をあまり見に行かなかったことがないが、気になったので見てみようと思った。」「お手伝いをして、お母さんから切り方や順序を聞きたい。」「親が疲れているときや大変なときに積極的に手伝おうと思う。」などの思いを記述した。記述した内容からは、自分の家庭生活を見つめ直したいという思いや、家族のことを考えた調理を実践したいという願いなど、家庭生活に積極的に関わろうとする気持ちが芽生えており、具体的な行動として表れていた。

## (2) 考察

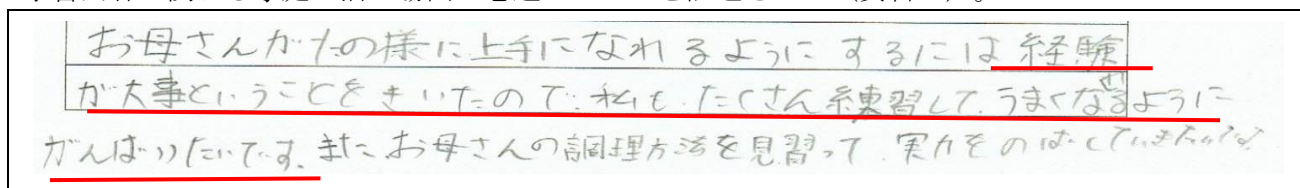
生活の営みに係る見方・考え方を明確にして題材を構成し、重視した見方・考え方に関連する手立てを取り入れたことによって、児童が家庭及び地域とのつながりを実感することができた。その結果、家庭生活に積極的に関わろうとする気持ちが芽生えたり、具体的な行動として表れたりした。よって題材相互のつながりと見方・考え方の視点を明確にした題材構成の工夫は、児童が家庭生活に積極的に関わろうとする態度を育てるために有効だったと考える。

このことは、生活時間や朝食の意義、いためる調理について学ぶ児童の発言が、より家庭生活に密接に関わる内容になっていたこと、家庭生活を常に意識し続けながら学習を展開できたことが児童の記述から読み取れたことから判断できる。児童は、毎時間、保護者や栄養教諭からのメッセージを受けて、自分の家庭生活と比較しながら学習していたと考えられる。これは、児童が学習の中で、家庭生活における朝食の営みを児童が見つめようとしたこと、そして、単にいためる調理について考えるだけでなく、いため物の家庭における登場頻度や食材の内容、切り方や味付け、見た目の違いなど多岐にわたる内容に着目して考えていたことが記述の中に明らかになったためである。

## 2 一単位時間における導入と終末の工夫

### (1) 結果

本実践では、家庭及び地域での実践を学習過程として位置付ける手立てとして、学習の導入と終末に、家庭生活を意識する場面を位置付けた。導入では、前時までの学習に対する児童の思いや学習の様子を保護者に伝え、保護者の思いを受けて感じたことを記述させた（資料2）。終末では、本時の学習内容に関わる家庭生活の場面で想起したことを記述させた（資料3）。



資料2 児童が導入に記述した家庭への思い

いためるのはかんたんだと思、ていたけどこんなにもずかしくて  
いっぱい工夫があることがわかりました。料理は大変だと思いました。

### 資料3 児童が終末に記入した家庭への思い

資料2の児童は、導入では、保護者からいためる調理への考え方や気を付けていることなどを聞いたことによって、保護者の思いを知り、経験を積むということに対しての意欲を記述していた。資料3の児童は、保護者にいためる調理における家庭での工夫をインタビューで質問しながら学習をし、終末では、いためる調理の難しさや家庭での工夫、料理の苦労などについての記述が見られた。

## (2) 考察

資料2の記述から、児童が導入で保護者を代表した2名の思いを聞いたことで、家庭生活において自分もいためる調理を上手にできるようになりたいという意欲をもち、積極的な態度で学んでいたことが分かる。自分がいためる調理の知識や技術を身に付けたいという目的意識をもって学習したことで、いためる調理における食材選び・材料の切り方・いためる順序・加熱時間・火加減・味付けなど様々な要素の重要性に気づき、その結果、簡単だと考えていたいためる調理の難しさやおいしく作るための様々な工夫に気付いたのではないかと推察される。導入と終末の双方で家庭生活との関わりを考える時間を設けたことで、自分がいためる調理を実践するという立場から離れずに学ぶことができたと考えられる。この結果、家庭での調理に目を向けようとしたり、家庭において実践を重ねていためる調理の技術を高めていこうとしたりする積極的な態度が表れたと考えられるので、導入と終末の工夫は有効な手段だと言える。

## IV まとめ

本研究では、家庭や地域に積極的に関わる態度を育てる家庭科の学習を目指して、「題材相互のつながりと見方・考え方の視点を明確にした題材構成の工夫」「一単位時間における導入と終末の工夫」の2点の手立ての効果を検証した。以下に、成果と課題を示す。

### 1 成果

- 見方・考え方を明確にした手立てを毎時間取り入れながら題材を構成したことによって、児童は、家庭生活に対して積極的に関わろうとする意欲をもち続けることができた。
- 一単位時間の導入と終末の双方において家庭とのつながりを実感させる時間を設け、ワークシートに記述を積み重ねたことによって、家庭生活を意識したり深く見つめたりする場面が増え、家庭での実践意欲の高まりにつながった。
- 導入で家庭生活での実践の意欲を高めてから学習に臨んだことで、学習内容や課題に対してより深く考えることができた。

### 2 課題

- 題材の全時間において、児童自身の家族が学習に関わることは難しかった。児童自身が家族の思いを日常会話の中で聞けるように、学校から家庭科の学習等を情報として発信していきたい。
- 自分の家庭を意識して考える場面が多く、地域や学校での食の在り方について考える機会が乏しかった。

## V 参考文献

- 小学校学習指導要領解説 家庭編 文部科学省 東洋館出版社 平成20年8月
- 小学校学習指導要領解説 家庭編 文部科学省 東洋館出版社 平成29年7月
- 早わかり&実践新学習指導要領解説 小学校家庭 開隆堂 平成29年10月
- 初等教育資料No.971 「内容「A家族・家庭生活」における改定のポイントと授業づくり」文部科学省 東洋館出版社 平成30年9月号

# 家庭科部会

司会者 工藤 知里 (旭川市立東栄小学校教諭)  
助言者 千葉 憲史 (旭川市立東栄小学校校長)  
岡田みゆき (北海道教育大学旭川校教授)

## I 授業の部会から ※主なものを抜粋

### 見方・考え方の視点を明確にした題材構成の工夫について

#### <授業者から>

児童は家庭生活を主体的に営んでおらず、よりよい生活とは何かを真に理解していないため、生活の中から課題を発見することが苦手である。保護者が意図して営んでいる家庭生活であるからこそ、改善をしていくことは難しい。そこで、協力・協働の視点を位置付けて題材を構成し、視点をもたせるための手立てとして、家庭生活を主として営んでいる保護者に、毎時間、学習に関わってもらふことを考えて題材を構成した。題材を構成するにあたり、朝食の栄養バランスやいためる調理などの家庭での実態を批判しないような授業展開になるように配慮した。

#### <参観者から>

- 保護者＝母親の協力体制がとてもよかった。保護者が学習に関わったことで、児童にとって自分ごととして捉えやすい学習内容となっていた。
- 家庭科の学習では、自分も同じように、自分の家庭生活の欠点を見付けるような学習にならないように心掛けている。保護者が、「いためる調理に正解はなく、家庭それぞれの在り方がある。」という言葉を見聞して児童に伝えていたのがとてもよかった。
- 自分の生活を見直す活動は昔から続けていることだが、家庭の保護者とどのようにつながるのが大切である。本題材では、主に母親との関わりを扱っていたが、児童を取り巻く環境にいる大人たち全てとの関わりも扱っていいのではないか。
- 保護者2名だけでなく、栄養教諭という2つの立場をゲストティーチャーとして学習に取り入れた理由や、それぞれの立場の学習の中での位置付けや役割どのように考えているのか。  
→保護者2名には、それぞれの家庭にいる母親としての役割で参加していただいた。児童の事前調査より、児童の朝食は9割以上が母親によって整えられたものだったためである。栄養教諭には、給食や飲食業など地域の中の「食」としての立場で関わっていただいた。



### 授業の感想・その他

- ICTの活用がよかった。児童が自分の調理や保護者の調理を振り返るために必要だった。しかし、映像をどの視点で撮影するのが調理方法等の分析ではとても重要になってくるため、撮影の仕方等についても吟味していく必要がある。
- いためる調理に適した食材選びについて、教科書にない「じゃがいも」を扱ったがよかったのか。家庭生活にとって身近である食材ではあるが、植物的に言うとじゃがいもは野菜に含まれない。授業者の意図や家庭との関連も含めて扱い方を考えていく必要がある。
- きゃべつの芯の扱いについて、教科書ではいためる調理では取り除く方法と、環境に配慮して芯を薄切りにして調理する方法が扱われていた。どちらの工夫も大切で、家庭での実態に応じて調理させる必要性を感じた。
- 保護者がゲストティーチャーとして参加していることに驚いた。それぞれの立場に求めたねらいも違っており、効果的だと感じた。

## II 助言者からの講評

### (1) 千葉 憲史 校長先生から

授業者が、本題材における学習の展開を一貫して意図的に構成していたことが伝わってきた。題材構成、導入と終末の工夫、家庭での実践を想起させるなどの三つの要素を、題材の全てにおいて、こだわりをもちながら学習を進めてきたことが伝わってくる本時の展開だった。家庭科の学習は、家庭と密接に関わる内容であるため、家庭生活を踏まえて展開していくことが重要である。しかし、家庭科で学習した結果、家庭生活での営みと異なることもありうる。しかし、本時でも、家庭科部会においても、授業者は「家庭での指導は間違いではない」という考えの下に学習を構成していた点が特に良かった。

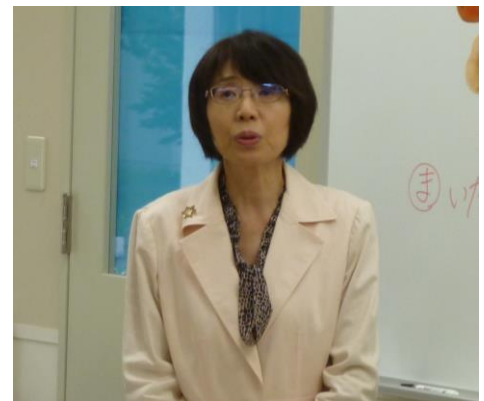


家庭科で実践すべき内容は、家庭との関わりが特に重要であり、児童が自分自身の生活と向き合っていく中で考えていくものである。また、中学校での「技術・家庭」の学習内容とも関連させなければならないなど、多岐に渡る指導内容であるため、教科の部会等において協力しながら家庭科の方向性を探っていくことが求められる。

これからの授業改善の視点でもあるが、本時では、ICTの活用・導入や終末の工夫・友達や周りの意見に耳を傾けて考えを深めるといった要素が全て含まれた授業構成になっていたのも、これからの家庭科の授業の在り方について考えながら授業を展開していくように心掛けていく必要がある。

### (2) 岡田 みゆき 校長先生から

本題材は、どの学校においても栄養バランスや調理の技術といった視点で野菜のための学習を展開しているが、これだけでは、児童の家庭での実践につながりにくいということが課題となっている。児童が家庭において実践をするためには、野菜のための調理に目的意識をもたせることが重要となる。家族のために野菜のためをつくるという目的意識をもたせることで、家庭の一員としての児童の立場も明確になり、家庭での実践を促しやすくなる。また、野菜のためを作ることを通して、家族と協力して生きていくという視点をもたせることにもなる。



家庭で、朝の忙しい中で朝食を摂取するという行為は児童にとって当たり前であるが、自分が家族のために調理をするという立場に立つことで、朝食を調理してくれる保護者に対する感謝の気持ちが育つ。いためる調理を科学的に扱うという方法もあるが、調理にも家庭生活にも正解はないので、家庭で自分に合ったものが自分流、家庭流となって児童の中に根付いたり、授業の中で他と交流して学びを深めたりしていくことが重要である。その結果、目的意識が高まり、学びが広がっていくと考えられる。

最近の家庭生活では、親子関係の問題などもあるため、家庭科の果たす役割は大きく、家庭科での学びは実践的な道徳であるとも言える。科学的な学びを深めることも、実践的な道徳としての家庭科を学ぶことも、どちらも重要であるが、本題材のように、授業者がどちらの方法で家庭科の授業を構成していくのかという信念をもって授業づくりをしていくことが大切である。